

未来を 創る

読売新聞社は日々 900 万部を超える
世界最大の発行部数を誇る新聞社です。技術スタッフは、
新聞というメディアのイノベーションを支える大黒柱です。
新聞制作とともに、インターネットを通じた配信で
ニュースを読者に伝えています。

技術社員
特別号

「新聞の力で、人々の生活を便利にしたい」と話す竹内さん



生活に役立つ「読売タブレット」に注力

未来を見据えた
技術開発

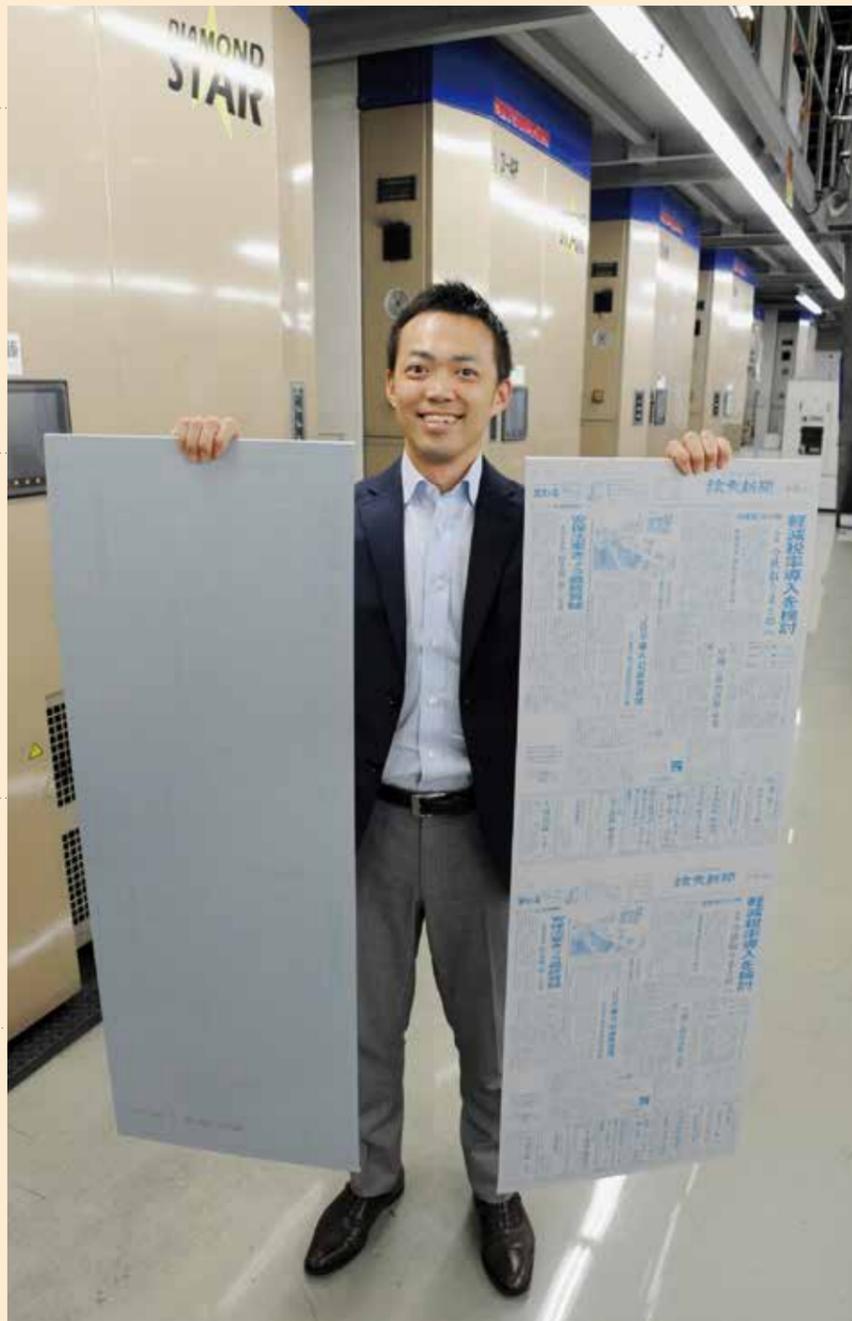
読売新聞が2015年12月にサービスを開始したデジタル事業「読売タブレット」。全社横断プロジェクトを主導したのは技術職のメンバーです。2009年入社竹内勇希さん(31)は、タブレットの目玉の一つ、ニュース配信アプリケーション「読売新聞デジタル」の開発チームリーダーを務めました。

チームのメンバーは、記者や読売新聞のウェブサイトを運営に携わったメディア局スタッフで、30〜50歳代の約10人。一番年下の竹内さんは、先輩たちから上がってくる「洗練されたデザインで」「写真や動画を大胆に使ってデザインしたい」といった要望を、時間やコストをあらゆる面から考え抜いて取捨選択していきました。

「新聞社が作るアプリなので、記事の読みやすさを重視したレイアウトに真心を込めたい。時間との戦いの中、できるだけいいアプリを作る」

目標を立てた竹内さんは、アプリの設計図を描き、開発業者に相談。細かい仕様の問い合わせに対応しながら、短期間で完成させました。

出来上がったアプリは、「単



輪転機を背に、従来の印刷用プレート(右)と今回実用化したプレートを掲げる坂本さん

画期的な仕事は、瑞々しい感性と継続的な努力があって初めて開花します。2015年度新聞協会賞・技術部門に選ばれた読売新聞の「新聞用完全無処理CTPプレートの開発と実用化」は、まさにそんなプロジェクトです。出発点は、制作局技術二部の坂本剛志さん(42)が抱いた「廃液が出ない、環境にやさしい印刷工程を実現できないか」という思いでした。従来の新聞印刷は、現像液を使うため、大量の廃液が発生します。坂本さんたちは現像液を必要としない印刷工程

を開発・実用化し、一切廃液が出ない、環境に優しい工程を実現しました。いくつもの難しいハードルをクリアできたのは、若い技術者の思いを尊重し、任せてくれる環境があったからだといえます。「いつ、どういったテストを実施するかなど、自由にやらせてもらった」学生時代は機械系を学び、モノづくりに興味がありました。多くの友人がメーカーを志望する中で、「新聞社も『新聞』を製造するメーカー。しかも、理系集団ではなく、記

環境に優しい技術 新聞協会賞

者や広告マンなど様々な人と関わりあって製品を作れる」と新聞社へ進みました。三宅島の火山噴火、箱根駅伝など新聞社ならではの現場も経験。「世界一の発行部数を支えているという自負は、ほかでは味わえない」といいます。「新聞を取り巻く環境は厳しいが、アイデアさえあれば実現できる可能性も高い。大きな仕事を任せたい人は楽しめるはず」今、「紙の新聞とデジタルの良さをどう融合するか」、自問自答を続けています。



技術職社員は、編集局幹部が翌日の紙面構成を話し合う「立ち会い」にも参加する

は、三浦半島で行われた研究セミナーで、新聞記事データを用いた自然言語処理の研究発表を聞き、「新聞記事が研究に役立つなんて」と衝撃を受けたと言います。「正確な情報と正しい日本語に裏打ちされた、いわば良質なテキストデータ」である新聞記事を生み出す新聞社への興味ที่わき、就職先として意識し始めたそうです。今では業務の傍ら、渋谷や六本木で夜間開かれていたIoT企業の研究発表会に足しげく通い、新しい技術の吸収に余念がない多田さん。「大量にある新聞記事データをを用いて精度の高い翻訳アプリを開発できたら、人類への貢献になる」と夢を膨らませています。

竹内さんは大学・大学院で、新聞制作とは畑違いの「たんばく質工学」を専攻しました。就職活動では、いったんは企業の理系研究職に内定したものの、新聞社の企業説明会で「新聞社の技術社員は、ITの力で、新聞やニュースをより多くの人に届ける仕事に携わっている」と聞きました。「子どもの頃から読んでいた新聞で、技術者が重要な役割を果たしているんだ」と知ったことが、入社をきっかけになったそうです。技術ス



「読売新聞タブレット」を手に、開発の苦労を語る竹内さん

「毎日必ず新聞を発行する」という新聞社の使命を果たすため、技術スタッフは「縁の下での力持ち」とも言うべき業務を数多く抱えています。リオ出張は、その一環でもあります。竹内さんは、「取材記者や写真記者をサポートし、オリンピック出場選手の活躍をいち早く日本に届ける手伝いをしたい」と準備を進めています。

に文字を並べるだけでなく、ニュースの重み、見やすいレイアウトをデジタルの世界で表現した「画期的な製品となりました。開発チームがつくりあげたアプリ約10種を搭載した読売タブレットは、12月から東京、埼玉、千葉、神奈川の1都3県でサービスを始めます。竹内さんは「自分の住んでいる地域のイベント情報から災害・犯罪情報まで、日々の生活を便利にする、新聞社ならではの情報が詰まっている」と胸を張っています。

「社内の風通しはものすごくよいと思う。私がアプリ開発に携われたのも、日頃からアプリ開発への興味を上司に伝えていたから」そう語る竹内さんは来夏、ブラジルで行われるリオデジャネイロ・オリンピックの取材支援のため、2か月ほど現地に滞在します。5年後の東京オリ



2014年ソチ・オリンピックのプレスセンターで機器をセットする技術社員

新聞記事を材料に ハッカソン

翻訳アプリ開発へ 夢を膨らませます

新聞社の未来を見据えたデジタル技術の開発も、技術職の重要な業務の一つです。メディア局企画開発部の多田哲馬さん(31)は2015年8月、NIT研究所と連携し、新聞記事と機械学習ソフトウェアを使って新たなアプリケーション開発を競う大会「ハッカソン」を都内で開催しました。ウェブエンジニアや企業の研究者ら約30人が参加し、記事を要約するアプリなどを発表したそうです。多田さんがハッカソンのテーマを機械学習に絞ったのは、「新聞社には、紙面の組み方やニュースの価値判断など、経験に基づいた作業が多い。そうした作業をコンピューターが担うことに、大きな可能性を感じている」からだと言います。大学・大学院でアルゴリズムについて研究していた多田さん



ハッカソン開催の経緯を語る多田さん

スタートアップと 新ビジネス開発でコラボ

読売新聞社では、デジタル分野で新しいビジネスモデルを開発した「スタートアップ（企業）」とコラボレーション（共同事業）を実現するために、社の所有する資産を公開してビジネス提案を求める「読売コラボ2015」を実施しています。提案は60以上の企業

から寄せられており、社長室システム企画部の栗山倫子さん（36）は「読売とスタートアップが協業することで、新しいサービスをどんどん生み出していきたい」と張り切っています。

読売コラボは昨春秋に初めて実施し、30を超える企業から応募がありました。いくつかの提案はすでに実現にこぎ着けています。

たとえば、ドライバーが利用できる個人宅の空き駐車場情報をインターネット上で公開している企業は、新聞販売店の宅配力を生かし、空き駐車場の募集チラシをまくことで業務の拡大を図ることができました。「読売タブレット」には、提

案を受けて採用された本の要約アプリや家計簿アプリが搭載されています。



「読売コラボ」の成果を語る栗山さん



出前授業 講師派遣いたします 「新聞社ならではのテクノロジー」

新聞記者が取材した情報をいち早く「新聞」や「WEB」といった製品（商品）にして皆様にお届けする。それを常に考えている「メーカー」の一面を持つのが技術総合職です。出前授業「新聞社ならではのテクノロジー」では、どんな仕組みで皆様の手元にニュースが届いているか、新聞制作の裏側を紹介・説明します。

- 小学生から大学院生、その他どの年代にも対応します。
- 日程、時間、講義内容についてはご相談ください
- 実施は無料です

お問い合わせ 読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局 ☎ 03-6739-6986



読売新聞技術総合職採用：技術総合職社員や仕事内容を紹介しています

YOMIURI ONLINE

YOMIURI PREMIUM



大手小町

読売中高生新聞

読売教育ネットワーク